随筆・評論

野村宗一
山口育子　選
山口一

特選

小さなパレード

日夏町　田中恵子

十二月の晴れた日の午後、近くのスーパーまで歩いて買物に行った。

今朝の新聞の家庭欄に、正しい歩き方が紹介されていた。背筋を伸ばし、腕は自然に振る。前足はかかとから着地して、後ろ足は親指でしっかりと蹴り出すのが健康に良いと書いてあった。

行きはその正しい歩き方を意識して、しっかり歩いた。ところが帰り道は両足がもつれそうになりながら、よたよたと歩くはめになってしまった。

右手に下げたスーパーの大袋は、破裂するかと思うほどふくれ上がり、押し込めた菓子袋の先が出ていた。左手には重い品物を詰め込んだエコバッグと、五個セットのティッシュペーパーがぶら下がっていた。

スーパーに入って、今日が特売日であることを知った。

見る物がすべて安いのだ。食用油、牛乳、りんごも買った。私は果物の中で一番りんごが好きなのだ。買わずにいられない。サバ缶も安かった。嬉しくて三個もカゴに入れた。卵も買った。レジに並んでからハッとする。

歩いて来たのだ。

少し返しに行こうか。もう後ろに五、六人が並んでいた。お得な買い物をしたのだ。返すのはもったいない。少々のことは我慢だ。歩いて十分もかからない。

テーブルの上で二つの大袋に詰め込んだ。奮い立って持ち上げた。スーパーの敷地から歩道に出たところで、もう腕が痛み出した。両足がおたおた震え出しそうになり、とても蹴り出すどころでない。

信号の向こうに、やっと我が家の屋根が見えてきた。立ち止まって、息を一つ大きく吐いた。何げなく、片側一車線の車道の向こう側を見た。八十歳位の女性が三輪車で前進してくる。前のカゴにも後ろのカゴにも、スーパーの袋が何個にも分かれて詰め込まれていた。カゴからあふれ出しそうな買物袋には、交差した紐が掛かっていた。彼女も特売から帰るところなのだろう。

その後ろに目を転じて、私は呆然とした。三輪車の後ろにはタンクローリーが続いていた。その後ろに、赤、白、黒の三台の乗用車が従っていた。続いて宅急便の大型トラック、軽トラック、また乗用車が二台、最後はデイサービスの小型バスだ。それらの車が整然と同じ速度で、三輪車のあとに付き従っていた。

小さなパレードが繰り広げられていた。パレードという言葉がすぐに浮かんだのは、先日、テレビでラグビー選手のパレードを見たからだろう。

ラグビーワールドカップ日本大会で活躍した日本代表選手たちが、東京丸の内仲通りをスーツ姿でパレードした。選手たちはオフィス街を八百メートルほど歩いた。両側には平日にもかかわらず五万人ほどのファンが声援を送ったということだった。

私はラグビーに全く知識がない。そもそも運動が苦手な私は、野球とかサッカーとか、よく耳にする競技でさえ興味がなかった。東京丸の内にも行ったことがない。それでも、八百メートルを歩いた選手たちと五万人の観衆という数字に心が動いた。目の前でそのパレードを見ることができていたら、感動せずにはいられなかっただろう。

今、私の前のパレードは観客は私だけだ。

先頭の女性は背中を伸ばし、ハンドルを握りしめ、両足を動かし続けていた。彼女は笑顔だった。私と一緒だ。安い物がたくさん手に入ってわくわくなのだ。早く家に帰って片付けたい。

重い荷物を前後のカゴに乗せ、三輪車のペダルを漕ぐのは重労働なのだ。重い大きな荷物を両手に持って歩くのも重労働なのだ。けれど彼女も私も嬉しくてたまらない。

三輪車は赤信号で止まった。

タンクローリーも従った。三台の乗用車も大型トラックも軽トラックも二台の乗用車もしんがりの小型バスも静かに止まった。

青に変わった。

パレードは再び始まった。整然と乱れなくゆっくりと出発した。その小さなパレードに私は拍手をしたかったのだが、両手が塞がっていた。

信号から百メートルほどの所で、タンクローリーが突然、右に大きく曲がった。反対車線に全く車がなかったのだ。乗用車も大型トラックも軽トラックも小型バスも、右へハンドルを切って次々と三輪車を追い越していった。

遠くに、一台の三輪車の後ろ姿が残った。それはどんどん小さくなっていった。

私はもう一度奮い立って両手に力を込めた。信号を胸を張って渡った。早く帰ろう。冷凍食品もあるのだ。

それでも渡り切った所で足がもつれて、転びそうになった。

（評）

日常生活の中で、ふと目にした光景を、温かい眼差しで描いた、心和む作品です。ユーモア溢れる生き生きとした描写が、情景を彷彿させます。老婦人に同士のような気持ちを抱き、彼女に従う車列に選手パレードを連想するあたり、筆者の感性が窺えます。身近な出来事の断片を、自分の視点と感性で掬い上げた佳品です。

特選

ふたりの時間

大藪町
外村輝夫

昭和四十四年（一九六九年）七月二十日、アメリカの宇宙船「アポロ十一号」の月面着陸船から、アームストロング船長が、月への第一歩をしるした。地球以外の天体に、人類として初めて足跡を残したのである。この決定的瞬間は全世界に伝えられた。

この年の十月六日、滋賀縣護国神社で結婚式を挙げた。当日の朝、出がけにゆっくりと空を見上げる。高々と澄み渡った秋空に浮かぶ白い雲、清々しい気分だった。自分たち二人の門出を祝ってくれているように思えた。

八人兄弟の末っ子で、十代で両親と死別、妻の母親もすでにいない。兄や姉は次々と彦根を離れたが、ひとりぐらい彦根に留まらないと両親に申し訳ない。十九歳から六畳一間の下宿生活も七年が経過していた。結婚当初から共働きで、夫婦の夢は、将来自分たちの土地に家を建てること。この夢は八年後にかなった。二人の子ども中心に、互いの時間を共有しつつ、その都度話し合いながら家庭を

築いてきた。子ども二人が保育園当時、朝の送りは私、迎えは妻の役割だったが、園では年長組と幼児組で早出の居残り。小学校では俗にカギっ子。小さい時から子どもたちに無理を強いてきた。そんな時、娘は常に三歳下の弟の面倒を、よく見てくれて助かっていた。

東京はじめ四ヵ所の単身生活は通算九年。無事に定年退職を迎えられたのも、家族の協力があったればこそである。昨秋結婚五十年、いわゆる金婚式を迎えたが、これまでを振り返ってみると、様々な出来事が思い出される。

この五十年間で、一度だけ妻に手を掛けたことがある。昭和四十六年二月、長女が生まれたときはこのうえなくうれしく、妻と二人で手探りの子育てに挑もうとしていた。ことに冬場の入浴は、風邪などに気をつかう。娘の入浴を手際よく済ませて、速やかに妻に手渡さなければならない。ある日、妻が車で十分ほどの実姉宅に出かけた。娘を風呂に入れることを知っているだろうから、おおよその帰宅時間を見計らって、娘を風呂に入れることにした。風呂から大声で叫ぶが返事がない。怒り心頭に発してきた。やむを得ず娘を抱いて部屋まで急ぐ。何とか産着を着せ終わったところに、息弾ませて妻が帰って来た。

「ただいまぁー。遅くなってぇ…ごめ…」

「いつまで行ってる。何時や思ってるんや」

言い放つと、妻の左頬を目がけて飛びつくように思いっきりぶった。一瞬だった。妻は何か言おうとした。が、私が聞く耳持たないと察すると、黙って娘の衣服を整え、ミルクの用意に取りかかる。黙々と、ただ黙々と……。それを見届けると足早に風呂場に戻り、湯船でようやく落ち着きを取り戻した。

そろそろ妻が帰って来るのでは……との思い込みから、暴力をふるってしまった。その場で詫びることなく、申し訳ないことをした。何年か経って妻に聞いてみたが、『全くおぼえがない』という。『いつ手をあげられるかとビクビクしていた』というかもしれないと思っていたので、拍子抜けした感じだった。

「子はかすがい」とは、子に対する愛情で、夫婦間が緊密になり、夫婦の縁がつなぎ止められることであるが、子どもたちには、若い頃から何事も「やる気と我慢と思いやり」のバランスで行動するよう、言い聞かせてきた。

二人の子が巣立って、妻と二人きりの生活も十六年と長くなった。一緒にいると互いにわがままが出るが、我慢にも限界がある。

ある熱い夏の夕食後、たわいもないことで言い争った。一度始まると自己主張が止まらない。二度と妻に手を掛けまいと、心に誓っていた。が、たまたま持っていたカバンを、目の前で思いっきり床にたたきつけた。

「いい加減にしろ……もう……ええわ……」

というや否や、車の鍵を持って玄関を出る。ところが車庫から出てすぐ、晩酌していることに気づいた。とは言えこのまま家には戻れない。仕方なくウォーキングに切り替えた。

かれこれ二時間、夏の夜風で酔いも醒め、怒りも収まって家に戻った。すると妻は、何事もなかったような顔をして、

「あれぇーどこにいたん。二階にいたんか」

笑うしかなかった。一方が感情的であれば、他方が冷静に受け止めれば喧嘩にならない。

他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる。二人で積み重ねてきた五十年。一緒に暮らす努力を惜しまないことにつきる。

長年連れ添った妻の味噌汁が、懐かしい母の味に似ていると思ったのは、単身生活を始めた頃で、随分昔のことである。昨秋、岐阜の娘から封書が届く。息子と二人からと、若狭塗の名前入り夫婦箸。そこに娘直筆の手紙が十枚。これまでの具体的な思い出を『ありがとう』のことばで幾重にも綴られていた。

今年、多賀大社の初詣での「おみくじ」

が、奇しくも夫婦が同じ番号。引き換えると「大吉」だった。今後は子どもたち家族の健康と幸せ、妻と結ばれて良かったと思えるふたりの時間を大切に、お互い穏やかに過したい。

（評）　金婚式を迎えた筆者が、積み重ねてきた五十年の、夫婦・親子の来し方を述懐しています。筆者の心に残る、妻との二つの出来事は、臨場感ある描写で、双方の心の機微と、男女の感覚の違いが表現されていて秀逸です。結びに、今の心境を述べて、しずかに余韻を残す作品です。

特選

母が遺した畑

平田町　谷澤　正己

昨年二月に母が亡くなって一年になる。九四歳の大往生だったが、最後の七年くらいは寝たきりで、兄夫婦がデイサービスを利用しながら最後まで自宅介護してくれた。

弟の私は実家の近くに住んではいるが、月に一度、母の顔を見に行く程度だった。

母の世話を兄夫婦にまかせっきりにしている後ろめたさもあり自然と足が遠のいた。

母が元気な時は、広い畑で野菜や花を育てていた。母は私ら兄弟にも畑を手伝わせたかったのだろうと思う。しかし、その頃の私は仕事や子供のことが生活の中心で、畑には関心がなかった。定年近くになり、子供が独立して妻と二人の生活になっていく頃には、もともと庭仕事が好きだったこともあり、自宅や妻の実家の庭の管理をするようになった。仕事や子育ては自分の思うようにはいかないが、庭や木々の世話は手を掛ければ掛けただけ、春には新緑の芽が吹き、花を咲かせて応えてくれる。

定年後、週4日の再雇用で働いているが、時間的にも気持ちの上でも現役時にはない余裕ができた。クラシック音楽や合唱、グラウンドゴルフも楽しむようになった。

しかし畑をやろう、とはまだ思わなかった。

母の四九日を終えた頃、兄から「道沿いの畑はお前が面倒見てくれないか」と頼まれた。私達は東京にいる妹との三人兄弟だが、「私も妹も何ももらうつもりはない、最後まで介護してくれた兄が相続すべき」と考えていた。しかし、最終的に道沿いの畑は私が引き継ぐこととなった。その畑は、母が寝たきりになって以降、長い間耕作されていなかったので全面が草でびっしりと覆われていた。

「引き継いだからには格好の悪いままでほっておけない」と思って、休みの日や四月五月の連休を利用して、草のじゅうたんを地面から引きはがすような作業を続けた。正に、草との格闘だったが、六月頃には草刈りを終えることができた。しかし、まだ畑をするつもりは無かったので、草刈り後は防草シートで全面を覆うことにした。これで二、三年は大丈夫と考えていた。暫くして畑に行ってみると防草シートが浮き上がっていた。犯人はおびただしい数のスギナであった。表面の草は刈ったが、スギナの地下茎は依然として残っていたのだった。通りすがりのお年寄り

が「スギナは地下の根を掘り出さんとあかん」と教えてくれた。再度一念発起してスコップで掘り起こすことにしたが、広い畑全部は無理と、周囲は防草シートで再度抑え込み、真ん中の部分だけスギナ退治をすることにした。畑を掘りながら、母が昔、「スギナはかなわん、いくらでも生えてきよる」と言っていたのを思い出した。それを私も追体験している。スギナ退治が終わったのは八月のお盆を過ぎた頃だった。その頃には「ここまでやったのだから少しだけ畑をやってみようか」と思うようになった。全部は出来ないと思い、周囲は防草シートのまま額縁状に残して、スギナ退治をした真ん中の部分で畑をすることにした。季節は秋になっていた。

手始めに秋ジャガを一二月に玉ねぎとスナックエンドウを植えた。

母の介護で庭や畑の世話をする余裕のなかった兄も、四九日を終えた頃から、私と同様に庭や家廻りの畑の草刈りを始めた。ここ数年、私は兄に母の世話をまかせっきりにしているという引け目もあり、あまり兄と話をすることはなかった。しかし、葬儀や四九日の法要等で話をする中で、徐々にお互いの気持ちも理解できるようになっていった。

私は結局最後まで母の世話ができなかったのだが、兄は長引く母の介護生活で、一時は介護鬱にもなりかけたようだった。その兄が、庭の掃除や畑の草刈りをするようになり、だんだんと元気になっていく姿を目の当たりにした。実家の庭や畑が、行く度に少しずつ整備され綺麗になっていった。これと呼応するかのように兄の気持ちも身体も前向きに回復していくようだった。庭仕事や畑にはそんな力があるように思える。

私が道沿いの畑で草刈りをしていると、通りすがりの方が誰彼無しに声を掛けてくれた。「綺麗にしやはったな」「おきばりやす」と、母もこの畑で近所の方達と賑やかに世間話をしていたのだろうと思った。

母が遺した畑を通して、兄と共通の話題が出来、最近は顔を合わせれば、お互いの畑の玉ねぎの生育のことや、「次は何を植えようか」と話している。畑デビュー元年の今年は、野菜の知識も無く大して収穫は出来ていない。しかし今は、畑仕事が兄と私の共通の楽しみとなり、兄弟で畑仕事ができる幸せを感じている。「畑の楽しさやっと分かったか」と天から母の声が聞こえてきそうだ。

五月には玉ねぎを収穫する、両親の墓前に供えようと思う。

（評）

疎遠になっていた兄との関係が、母の遺した畑によって修復されていく様子を、畑の描写を織り交ぜながら描いています。引き継いだ畑の仕事は、草刈りに始まり季節を一巡して、今や兄弟の共通の楽しみとなった喜びが、気負わず淡々と綴られて、穏やかな読後感が残ります。

入選

蜜柑の極意

犬上郡甲良町
上野初子

「今年は買うことといらんぞ。」
縁側から聞こえる夫の声。やけに嬉しそうだ。その言葉を受け、「そりゃ良かった。」と言いながら、無造作に置かれた段ボール箱に目を遣った。

そこに盛り上がっていたものは不揃いなミカンたち。ピンポン球にも届かない位のものから握り拳ぐらいの無骨なものまで、おもしろいほど多様であった。それらは、屋敷畑の片隅に植わっている温州蜜柑の木から収穫してきたものである。

三十年程前、バブル経済が始まった頃、「ふるさと創生一億円事業」が行われた。それに伴って、全国の市町村では創意工夫を凝らした事業が展開されたそうだ。

その事業の一環として、「甲良町では全戸に蜜柑の苗木が一本ずつ配布された」と聞く。何年か後豊かに実を付けるだろう、という展望を持つことにより、町民をより活気付けようとしてくださった試みであったに違いない。

さて、当時の我が家の状態を思い起こせば、幼い息子たちを義父母に見てもらいながら、私はフルタイムで齷齪と働いていた。

だから、配られた蜜柑の苗木を誰がどのように植えてくれたのかを全く知らない。

ただ、数年が過ぎ実を付けるようになると、「酸っぱい。」とか「ちっちゃい。」とか言いながら頬張っていた義父母の姿は思い出される。

そして、何しろ苗木の世話をする余裕も無く、ほったらかしだったから、付ける実の数も、そう多くはなかったはずだ。

そんな訳で、年の暮れにはミカンの大箱を買うことが我が家の恒例となっていた。

やがて年月が流れ、夫も還暦を超えると、少しばかりの余裕が生まれ、特に樹木の剪定などに興味を持つようになった。

「ボサボサに伸びたムクゲの枝をスッキリさせて欲しい。」という私の頼みを夫は快く引き受け、バッサリと切ってくれた。

するとその木は翌年、また見事な生長振りを見せた。「すごいなぁ。」などと言いながら、私も植物の生命力に感動したものである。

そんな頃、植えてから伸び放題だった蜜柑の木が目に止まったらしく、夫は適当にパチパチと枝を払った。

私自身も、込み入った枝を透いてもらったのだから、以後はとりわけミカンがより多く成るような期待さえ持っていた。

ところがその翌年は、それまでに無い「凶作」であった。夫には黙っていたが、私にはあの無謀な剪定が原因のように思われてきた。

そこで不慣れなパソコンを駆使して、柑橘系の剪定について調べてみることにした。

園芸の知識が全くない私だから詳しいことは理解できないが、実を付ける樹木全般に共通して言えることが何となく分かってきた。

大切なことは、その年に実を付けた枝を取り除き、不要な所に栄養分が行かないようにすること、そして、隔年結実の是正に努めること…。

一方で、剪定の目的とは、「日当たりの向上」ということが上げられるそうだ。つまり、「どの枝葉にもできるだけ満遍なく日が当たるようにすれば、実の大きさも自ずと揃う。」ということかな、と自分なりに考えている。

そのような観点から、ご近所で育てておられる蜜柑の木に少しばかり目を遣れば、庭木として、こぢんまりと樹勢を整えておかれる。

そしてそれらの木には、そう多くではないけれど、毎年大きさの揃った実を付けている。

それは正しい剪定がなされている証拠である。
さて我が家の場合、無残な結果になったのは、「枝が伸び放題だから」ということで、むやみにバサバサと切ってしまったからだ。
しかしながら、その私が知り得た知識を夫に伝えるべきなのだろうか。迷ったあげく、やんわりと提案してみた。
「剪定してくれたら、ミカンが成らなかったのやから、もう枝を切るのを止めよう。」
すると意外にも夫は、「そうやな。」と頷いた。そしたら有り難いことに、翌年からは、辛うじて実を付けるようになったのである。
そして今年、北風が少し冷たく吹く日、夫は喜び勇んで段ボール箱を抱えて収穫に取り組んだ。ここ数年間伸び続けた枝には、あっちにもこっちにも、大きいのやら小さいのやら、本当に幾つものミカンがたわわに実ってくれていた。夫は、まるで子どものように鼻唄混じりで鋏を動かした。
そうやって収穫したミカンを、彼は早速頬張って、「甘い、うちのミカンは甘い。」と自慢げに呟いた。私も一袋貰って口にした。さほど「甘い」とも思わなかったけれど、「ほんまやなあ。」と話を合わせた。仮令(たとえ)それが正しくなくてもお互いが納得できればそれでいい。何十年も前に頂いた一本の蜜柑の苗木のお陰で、老いた夫婦が、何でも無い日常の暮らしの中で、細やかな幸せを見つけた。

（評）三十年前に町から配布された一本の蜜柑の苗木が、実を付けるに至った経緯を、滑らかな展開で綴っています。剪定や味見を巡って交わされる、夫婦のさりげない会話文が効いて、全篇に温和な雰囲気が漂います。暮らしの中で見つけた「細やかな幸せ」が、情感豊かに伝わってきます。

入　選

唄えたよぉ!!

後三条町　江畑　民子

「新年会のあと、カラオケBOXを予約したから、みんな三曲唄えるようにして来て」
陶芸サークルの幹事から伝達が来た。
「どうしよう、みんなに聞かせる歌が一つも無い。演歌なんか唄えない」
カラオケで、以前に嫌な体験をした。それから一度も行っていなかった。
三十年前、PTA役員をしていた頃、年末に懇親会があり、その後にカラオケに行った。早速始まった。静かな人が、いきなり唄い出した。圧倒された。みんな上手い。次々とマイクを握り、小さな舞台に上がって行く。とうとう最後になった私に、マイクが渡された。
演歌は唄ったことが無い。当時流行っていたフォークソングも、何となく聞いているだけで唄えない。
その頃の私は、四人の子供の世話と家事に追われる日々だった。テレビに流れる歌を、背中に聞き、鼻歌で軽く頷く程度だった。
「四季の歌」を入力、ボタンを押した。唄い終わったが、みんなの目は冷やかだった。
「学校のコーラスじゃないよ」
「演歌の一つ位、前もって練習しときや」
盛り上がっているみんなとは反対に、この場から逃げ出したかった。
その時の校長先生が、舞台に上がった。
「あの歌唄うよ。きっと」
周りで囁(ささや)かれていた。先輩達が噂した。
マイクを掴み、腕を組み、足を大きく開き、唄い出した。音程も外れているような、声もかすれている。それなのに、聞いていて気持ちが良い。
二十歳になった息子と、酒を飲むのが夢だと言う歌詞だ。お酒の力なのか、にんまりと微笑みを浮かべている。息子と酒が飲めたのだろうか。みんなの想像が駆り立てられる。
毎日、しかめっ面の校長先生の顔が穏む、唯一のひと時なのかも知れない。唄い終ると、満面の笑顔になった。優しい顔だった。

私達の新年会では、三曲の持ち歌が決められている。どうしたものか悩んだ。その日まで二ヶ月あった。

「よし、絶対唄えるように頑張ろう」

サンミュージックに行き、CDを五枚借りた。歌詞に、上がり、下がりの印を入れ、何回も聞いた。少しずつ覚えていった。

一人カラオケで練習しようと、近くのカラオケ店の前を、車で行ったり来たり、何日も繰り返した。勇気が出ない。

やっと、やっと、駐車場に入った。受け付けはどうするのだろう。一人で部屋に居て恐くないだろうか。不安ばかりだ。

迷っていても仕方がない。一大決心して、

「初めて来ました。機械の使い方も解りません。一人です」

「大丈夫、教えますから。楽しんで下さい」

「あぁ、とうとう来た。一人で来られた」

説明も親切だった。やっと部屋に入った。

ピンクの壁の可愛い部屋だったが、やはり一人は心細い。深呼吸を繰り返した。昔、唄った「四季の歌」を入力した。堂々と声を出し唄おう。思い出の曲だ。

一人カラオケ、誰にも気を遣わず、間違っても平気だ。息つく間も無い程、唄い続けた。二時間は、あっという間に終わった。

やっと、入れたカラオケ店だ。一時間延長して余韻を楽しんだ。部屋中に響く自分の声に酔う。エコーは心地良い。

CDを選ぶことも、楽しみの一つとなった。

三曲をクリアした。誰もが知っている、都はるみの「好きな人」、テレサテンの「つぐない」、坂本冬美の「祝い酒」だ。

曲が決まった。これからは、この歌に感情を込める練習をしようと、一段と熱が入った。男性幹事も、一年前から一人カラオケに目覚め、毎日通っているそうだ。

唄う楽しさ、歌詞に思いを添わす楽しさ、心も体も元気になる。幹事に感謝しよう。

いよいよ新年会当日、楽しい昼食会が終り、カラオケ店に移動した。みんな自信たっぷり、次々入力している。酔っているので、身ぶり、手ぶり、こぶしを大胆に効かし、堂々と唄う。

「上手いよー」

「良いよー」

大きな拍手を送る。満足顔でVサインを返す。十五人の大部屋は、笑顔で満ち溢れていた。

都はるみの「好きな人」を入力した。この歌は、少々音程が外れても、元気に声を張り上げたら何とかなる。弾む声で、元気一杯に唄った。足がガクガク震えていた。

大拍手を貰った。

「あぁー、唄えたぁー、感動だよぉー」

昔、「四季の歌」を唄い、「演歌の一つ位覚えておいでよ」と言われたことが、辛い思い出として残っていた。やっと克服できた。

苦手だったカラオケに、挑戦できたことが嬉しい。みんなで肩を組み「琵琶湖周航の歌」を、大きな口を開け、力一杯唄った。

（評）子育てと家事に追われ「カラオケ」とは無縁で苦手だった筆者が、挑戦して辛い思い出を克服した体験を、素直に綴っています。三十年前の懇親会での場面と対比して、今回は練習の努力が実った最終場面に、緊張と溢れる達成感がよく表現されて、共感を呼びます。

入選

井上靖と「星」

平田町　愛藤眞佐雄

人は身近な人の死に遭遇した時、自分の心の中で死者とのつながりをどのように保ち、それを受け容れていくのだろうか。

井上靖の『星と祭』は、そのことを示唆してくれる。主人公である架山の娘は、男友達と琵琶湖でのボート転覆という事故に遭い命を失う。娘の突然の死に対して架山は当初は

受け容れられず、生と死の間にある「殯（もがり）」という古代の考えに結び付け、娘の葬儀をあげないままでいた。

その後、大学教授の「どこかの星に同じ自分が居て、同じことを考え、同じことをしている」という言葉を聞く。架山は、星の一つに自分を置くことで、娘の死を客観的に見ることができたのである。

娘の男友達の父親の影響もあり、架山は、琵琶湖を見つめ人々の悩みや苦しみを救うと言われる十一面観音像の全てを訪ねていく。やがて、それらの全ての観音像が一斉に立ち上がり、去って行く姿を幻覚の中に見る。

そこで、娘の霊は祀られ娘らはもう湖の中にはおらず、神や仏になり天に上って星になったと信じることができたのである。

このような死への受容の仕方があることに私は気付かされた。かつて渡岸寺の十一面観音像を拝観したことがあるが、今一度出会えるなら、全く違う思いで拝むことであろう。

その後も、井上の作品に惹かれ、『孔子』を読んでいる時、次の一節に目が止まった。

〝星闌干〟の三文字がぴったりする、星が輝き、流れ、墜ちる夜空の下、地上の深い闇の中に、天の声を抱いて立っていたのであります。

『孔子』は、井上が食道ガン手術後の昭和六十二年六月から平成元年五月、八十歳から八十二歳にかけて『新潮』に連載され、彼の最後の長篇であった。

約二千五百年前の中国は、春秋末期の乱世であった。その中に、十四年にも亘る亡命・遊説（ゆうぜい）の旅をした孔子とその弟子たちがいた。彼らの生き様や孔子の詞（ことば）を、架空の弟子・蔫（えん）薑（きょう）が語る形で物語が構成されている。

孔子の放浪遊説の折り返しになった負函（ふかん）は、師に従っていた蔫薑にとっても懐かしい思い出の地である。四十年ぶりにそこに近づいた蔫薑は、大平原の真っ只中の集落に燈火が入りつつある光景を見て、そこを「故里（ふるさと）」と捉える。夜空を仰げば、まさに「星闌干」である。

「道の将（まさ）に行われんとするや、命なり。道の将に廃（すた）れんとするや、命なり」。孔子が説く「天命」という詞が持つ意味の重さを教え、私に突き付けて来る。どんな境遇にあろうとも、決して希望を失わないことが大切であると、訴えてくる。

井上は、また詩人でもあった。いくつかの詩集を出している。平成元年一月には、「星闌干」の詩を次のように書いている。

夕刻、書斎の窓際に立ち、たまたま想いを、己が幼少時代を過ごした伊豆・天城山麓の郷里の村に馳せる。故里の集落は小さい宝石の固まりのようなものになって、果てしなく遠く、静かな、

――たとえて言ってみれば、天体の入口とでもいったような所に置かれている。

夕刻になると、その小さくて、遠い、宝石の村には燈火が入る。点々と、燈火は点っていく。やがて、それに呼応するかのように、その集落の上に大きく広がっている夕空のあちら、こちらでも、星が、これまた点々と輝き始める。……

幼少年時代に血のつながりのない祖母に育てられた井上にとっての「故郷」とは、その祖母と過ごした伊豆にあった。この詩は、先の『孔子』の一節とまさに符合する。井上にとっての星は、故郷とともに浮かぶ「心の拠り所」になっていたのだ。

「星闌干」の最後は、次のように結ばれている。

このような星の乱れ、飛ぶ、烈しい交錯の中に、故里の夜空のあの独特の美しさの中に〝平成〟の自分を立たせることができたらと思う。

その二年後に井上は亡くなっている。数多くの作品を書き上げ、八十歳を過ぎても〝平成〟という時代に自分を立たせたいという井上の執念のようなものに惹かれる。

井上が亡くなってから三十年の時は流れたが、彼の作品の一つひとつが私の生き方に、いま重く問いかけて来る。〝令和〟という時代に入り、今の世の中はそれこそ、世界が「暗い闇の中」へと入っていく感がする。

たとえ愛する人を失い、時代が闇の中に入ろうとも、「希望という星」を抱きながら歩むことの大切さを、井上自身が星の一つとなって、光を点してくれているように思う。

（評）冒頭に、「死」の受容について問い掛けを置く構成で、重い主題に挑んだ作品です。筆者は井上靖の作品から「星」にテーマを絞って考察しています。答を模索するなかで、彼の生き方が指針として光を点している、という筆者の感懐は、この作品に相応しい締め括りとなって、心に響きます。

入選

丸ちゃん変身誘導記

本庄町　田口敏子

それは五つ違いの妹が未だ生まれていない頃のことだった。

私は毎晩祖母と寝ていて厭きもせずドンブラコ、ドンブラコ、と川上から大きな桃が流れて来る話を聞きながら眠るのが常だった。

ある日父の自転車に乗せられて峠を越えたお医者さんの所へ行った。

猟銃を担いでハンチングを被り闊歩する医者の陰影が脳裏に刻まれたのは何時の頃からかわからないが、その時その医者はそこに居たのだろうか？

家に帰って私は土間の下段に手を突いた恰好で浣腸され踏ん張った。祖母が父が笑っていた。恐らく記憶に残る人生はじめてのこれ等の思い出が、生家の佇まいと共に想い出されて懐かしい。

その時の私の異変に気付いた経緯など知る由もない遠い日のかすかな羞恥漂う記憶である。

それが八十有余年の月日を経て想い出されたのは近頃頑なに引き籠もる丸ちゃん達に囚われる様になったからだった。

いゝ加減にあしらっていたが改善の兆しが見られなければ丸ちゃん達の言い分にじっくり耳を傾けてみなければなるまい。

年号が令和に変わる五月前の土曜日から、昭和の日、退位の日、即位の日、憲法記念日、みどりの日、こどもの日等々珍しく十連休となった初夏、久し振りに帰省した孫と話が弾む席で来年の彦根文芸に『丸ちゃん変身奮闘記』を出して見る予定だと事の次第を話すと、「おばあちゃんそれって糞闘記じゃないの？」とからかう。

あからさまでは如何なことにも恥ずかしく柄にもなく体裁にこだわれば表題にも一工夫いるのである。丸ちゃん軟化に飲む水の量を増やせと言い置いて孫が帰ったあと、さて一日にどの位の水を飲んでいるのか手許のカレンダーに書き込んでみることにした。

朝起きたてのコップ一杯の水からはじまり、みそ汁も含めて時間毎に飲んだ水の量をccで書いてゆく。

二ヶ月過ぎて大体一日一リットルかなと思ったところで友人に話すと、一・五リットルは飲むと言う。一緒に外出する時極まって『ハワイの海洋深層水』なるペットボトル一本を手渡してくれる友人である。なる程、こまめに水を飲む様とスベスベした木目細かい肌が明らかに私との差を現わしている。

水と共に自ずと丸ちゃんお出ましの日を赤い丸で印す様になった。立派に変身していれば二重丸である。

食べ物についても栄養のバランスは元より緑黄色野菜たっぷりのサラダや、ゴボウ、甘藷等の根菜、納豆、ヨーグルト、チーズ、味噌、漬け物等の発酵食品、水溶性で腸内ではゲル状になり丸ちゃん軟化に役立つ海藻や、コンニャク、リンゴ、バナナ、キウイ等々努めて採る様気をつけている。

今では簡単に好き放題手に入るこれ等の食品も戦後の物資配給統治制度があった頃の学生寮では、昼御飯が赤茶けた粗目軽く一握りだけという日もあったのだから、平和な今の世を喜ばずにはいられない。

八月の盆休みに墓参りに帰省した例の孫にカレンダーを見せると、水の量と赤丸印の羅列に目を丸くして「へーえ！六月七月段段よくなって来てるじゃん！」と宣(のたま)う。

筋肉の衰えを感じて止めたが三年前まではゲートボールを楽しんでいた。河川敷の運動公園に毎朝堤防の急な坂道を上り下りして通い軽い球技とは言え続けていれば結構なよい運動になっていたのだろう。そこでは青空の下春は鶯、初夏には葭切が囀り、時にホトトギスが鳴き渡った。

家に引き籠もっていては出合えない自然の恵みに心身共にリラックスしていたことだろう。今は老人会主催の金亀(根気)体操に努めて参加する様にしている。毎週月曜日の朝お臍を覗き込みながら椅子に腰掛けた足の踵を上げ腹筋を意識しながら膝頭を強く押える等々の運動をテレビ画面を見ながら皆さんと楽しくやっている。

水と食物、運動とリラックス、どれも丸ちゃん変身に関わる大切な生活習慣であり気を付けていても何時も何時も理路整然と赤丸が並ぶわけではない。なるべく薬に頼らず自然のまゝにと思う私は四日も赤丸が無いと少々不安になるがそんな時オリーブオイルを滴らしたジュースや炭酸水を飲んだり、上行、横行、下行結腸を意識して撫で摩ったり、腸捩りヨガを試みたりしたあげく五日目大きな二重丸が付くと安堵して、一週間に二日あればまあい、かと開き直るのである。たまの宴会で大食することはあっても抗えない自然な体全体の衰えを慮り食事の糧は少なくなっているのだろう。それでも自からが発信する信号を聞き分けてコントロールして体調を整え快腸で快調な日々を楽しみながら過して行きたい。

（評）本来は作品にしにくいテーマながら、便秘の改善に奮闘する体験の数々が、ユーモアを交えて綴られています。孫の助言も採り入れ、様々な工夫を重ねる筆者の努力は、生への前向きな意欲に支えられていることが、作品からよく伝わってきます。

佳作

茶道と俳句の方法

日夏町　寺村　滋

佳作

彦根城普請に伴う兵糧輸送

大藪町　吉田和治

佳作

俳句のきっかけ

本町一丁目　中島暉枝

佳作

同窓会

日夏町　成宮恵津子

佳作

父を想う

仏生寺町　小野　隆

佳作

小さな介護人

芹橋一丁目　楠亀　美恵子

《総評》

今回は、新型コロナウイルスに言及した作品を含めて、二十三点の力作が寄せられました。取り上げられた題材は、実に多彩です。それぞれに、筆者の顔が見える、個性輝く作品が揃い、合同審査の選考も難しいものとなりました。

読者に、自分の思いやメッセージが鮮明に伝わるように、「題名」を吟味し、展開の「構成」と的確な「表現」に意を注ぎ、「推敲」を重ねたいものです。この推敲の過程が、自分を見つめ人生を深めることに繋がると思われます。

最後に、イタリアの先人の言葉を引用します。これは島崎藤村が愛誦し、小説家・城山三郎が自分の人生を変えたという箴言です。

静かに行く者は　健やかに行く
健やかに行く者は　遠くまで行く

この「健やか」には、人間と社会を深く豊かに見る眼差しも、含まれるように思います。

私達も「書く」営みを通して、自分を見つめ人生を深めながら、一歩ずつ「静かに、健やかに、遠くまで」行きましょう。

山口育子